秋田県文化財調査報告書第38集

新秋田空港周辺遺跡 鹿野戸遺跡 石坂上遺跡 発掘調査報告書

1976・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

秋田県河辺郡雄和町鹿野戸遺跡・石坂上遺跡は縄文時代中期の遺跡で，住居跡，石器，土器などの出土で注目されていましたが，新秋田空港建設地に隣接する地域にあるので，この度緊急発掘調査を実施いたしました。

本報告書が県内に所在する遺跡の解明と保存への一助になれば幸いと思います。

調査を担当されました各調査員，ご協力をいただいた雄和町教育委員会の方々に深く感謝の意を表します。

昭和５１年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

目　　次

1　調査に至るまでの経過……1
2　調 査 の 構 成……1
3　遺 跡 の 立 地……1
I　**鹿 野 戸 遺 跡**……3
①　調査方法と過程……3
②　遺 構 と 遺 物……5
③　ま　と　め……11
II　**石 坂 上 遺 跡**……19
①　調査方法と過程……19
②　遺 構 と 遺 物……19
③　ま　と　め……21

挿 図・図 版 目 次

鹿野戸遺跡

遺跡周辺地形図……2
挿図1　遺 跡 全 体 図……4
挿図2　発掘区域と遺構……5
挿図3　住　居　跡……6
挿図4　住 居 跡 炉……7
挿図5　1号フラスコ状ピット……7
挿図6　2号フラスコ状ピット……8
挿図7　土 器 拓 影……9
挿図8　土 器 拓 影……10
挿図9　石 器・石製品……11
図版1　遺跡遠景・発掘調査のようす……12
図版2　竪 穴 住 居 跡……13
図版3　土器出土状態……14
図版4　2号フラスコ状ピット……15
図版5　出 土 土 器……16
図版6　出 土 土 器……17
図版7　出土土器・石器……18

石坂上遺跡

挿図1　遺跡地形図……19
挿図2　遺構配置図……19
挿図3　1号竪穴遺構……20
挿図4　2号竪穴遺構……20
挿図5　3号竪穴遺構……20
挿図6　4号竪穴遺構……20
挿図7　土器拓影……21
図版1　遺跡遠景，1号・2号竪穴遺構……22
図版2　3号・4号竪穴遺構，出土土器……23

新秋田空港周辺遺跡・鹿野戸遺跡・石坂上遺跡発掘調査報告書

1．調査に至るまでの経過

秋田県では，秋田市割山にある秋田空港が将来ジェット機の発着を考えると，市街地に近く手狭であり，その上，海辺に近く海岸線に並行に滑走路が設置されているため，冬期の気象条件が飛行機の発着陸に好適とは言えないことなどの理由から，新秋田空港の建設を計画して，予定地を他に求めることにし，数カ所に候補地を上げていた。

昭和48年に三つの候補地の内の一つ，河辺郡雄和町の出羽山地地域に2㎞の滑走路を持つ新秋田空港建設が決定し，昭和49年度から新秋田空港関係工事のための取付道路工事，拡幅道路工事がはじまった。このため，この道路近くやこの道路に至る路線付近に所在する周知の遺跡を，事前に発掘調査し，遺跡の性格を解明すると共に記録保存し，今後の研究資料に供するため，本年度「鹿野戸遺跡」「石坂上遺跡」の二遺跡を緊急発掘調査したものである。

2．調 査 の 構 成

調査期日　昭和50年10月17，18，19，20，25，26，27日

調査主体　秋田県教育委員会

協力団体　河辺郡雄和町教育委員会

調査場所　河辺郡雄和町椿川字鹿野戸 101番地。同石坂上13の33番地

調 査 員　伊藤種秋　由利郡東由利町玉米小学校教諭　（日本考古学協会員）

岩見誠夫　秋田市立八橋小学校教諭　（日本考古学協会員）

永瀬福男　山本郡山本町立森岳小学校教諭　（日本考古学協会員）

調査事務担当者

秋田県教育庁文化課　門　間　光　夫　主任学芸主事

河辺郡雄和町教育委員会　佐々木　金　也　社会教育係長

調査協力　河辺郡雄和町役場土木課

河辺郡雄和町椿川部落有志

3．遺 跡 の 立 地

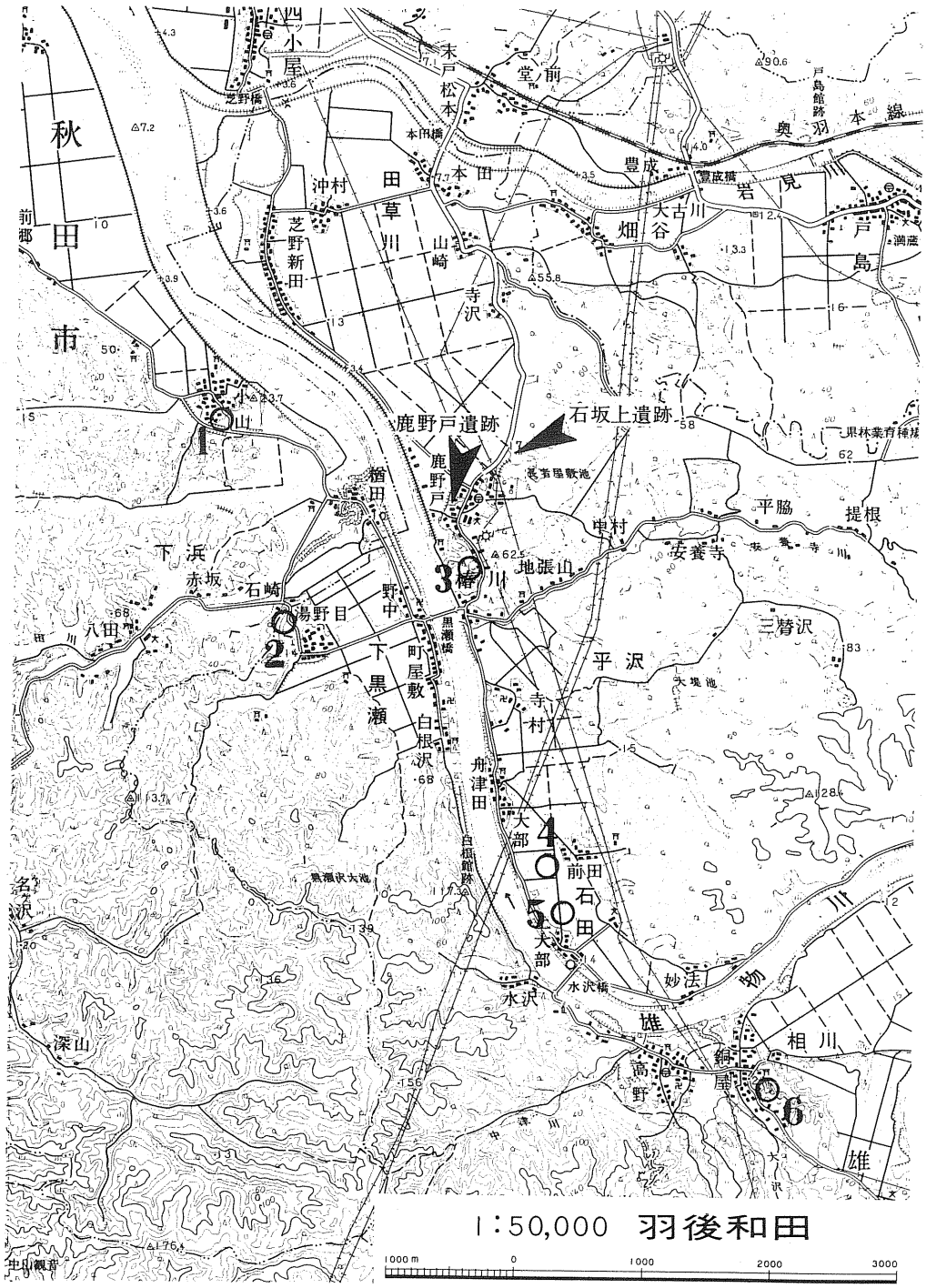
秋田県の海岸寄りの地域を，南北に走行している出羽山地は，南から子吉川，雄物川，米代川の三大河川によって大きく分断されている。

雄和町は，この雄物川が出羽山地を分断して，秋田平野に流れ込む地域を占めており，大正寺村，戸米川村，種平村，川添村が合併して出来た南北に細長い町である。

町の中央を雄物川が流れ，その岸を県道が通り，それに沿って南から新波，川崎，高野，舟津田，椿川等の集落が点在する。

椿川は，雄物川の東にある出羽山地の末端が，雄物川岸に舌状に張り出した台地の縁辺に当たり，

遺跡周辺地形図



○ 縄文土器散布地　（1．狐森遺跡　3．袖ノ沢遺跡　6．銅屋遺跡）

● 土師器，須恵器散布地（2．湯野目遺跡　4．平沢遺跡　5．石田遺跡）

標高15～20mの平坦面を持っている所である。ここはかっての川添村中心集落で，県道添いに家が集まっており，下の沖積地水田面との比高は５～10m程度である。

鹿野戸遺跡は，この集落のほぼ中心，県道西側の台地縁の畑地にあり，石坂上遺跡は集落北のはずれに存在する長者屋敷池の傍に位置し，遺跡の一部は現在とりくづされ，砂利置場となっている。

周辺には遺跡が多く，地続きの袖ノ沢には縄文期の遺跡があり，県道東側の川添小学校の後にせまる山際から，歴史時代の須恵器の出土を見ている。また，雄物川をへだてた対岸の豊岩地区にも遺跡があり，ややはなれた同町石田，平沢の畑地や水田下には，土師器，須恵器を出土する遺跡が存在する。

Ⅰ　鹿　野　戸　遺　跡

①　調査方法と過程

遺跡は，渡辺慶治氏と堀井市太郎氏所有の大豆，小豆畑に所在し，表面採集の遺物等から，縄文中期と後期のものであることが確認されていた。

堀井氏所有の畑は，戦後のある時期に一部発掘されておるため，調査区をそれ以西とし，渡辺慶治氏所有の収穫の済んだ小豆畑にグリッドを設定し，調査を実施した。

グリッドは，２m四方のもので，算用数字とアルファベットの組み合せで呼び，位置づけることにした。

〈調査日誌〉

10月17日（金）　晴

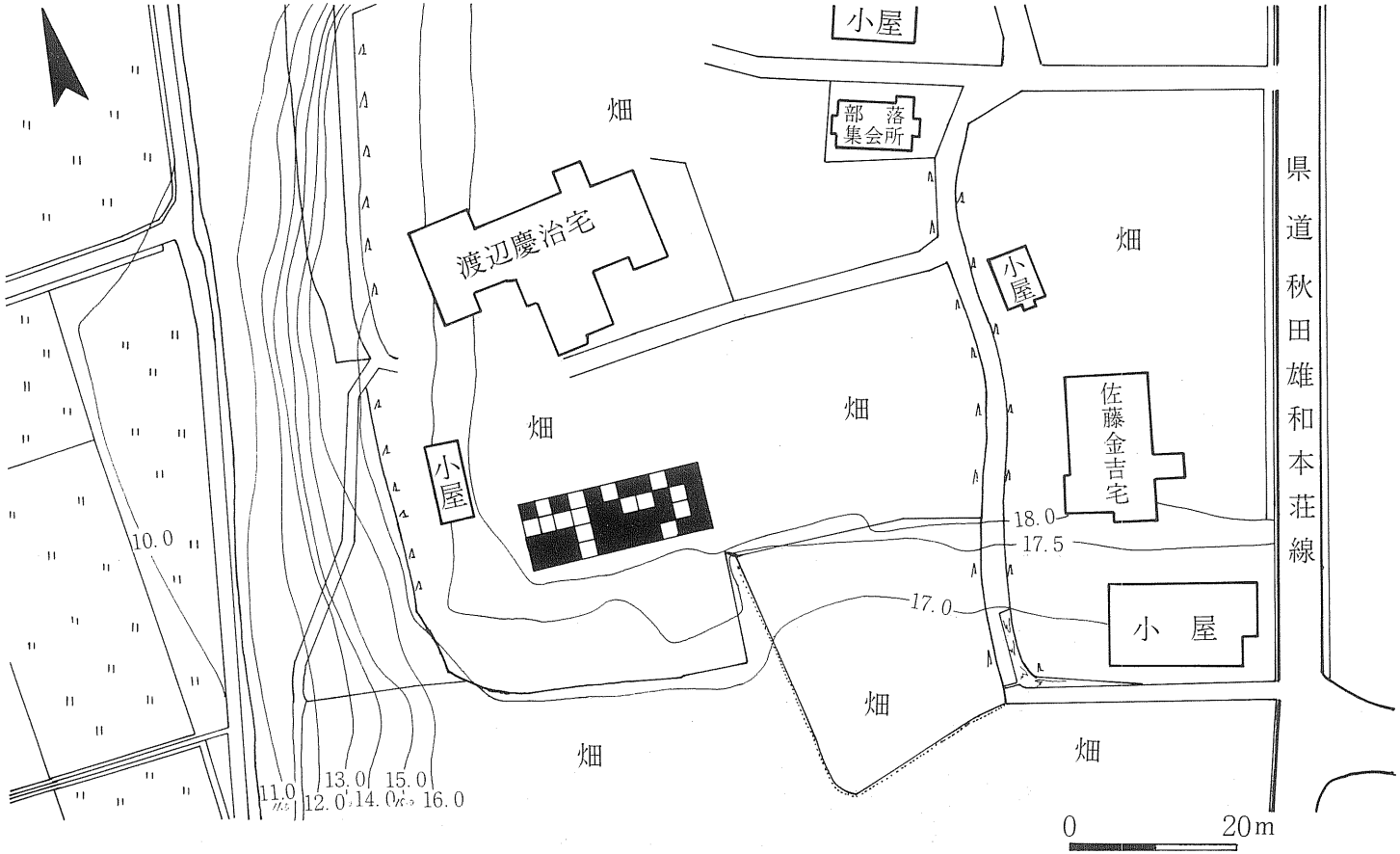
８時30分，雄和町公民館に調査員参集。９時30分遺跡到着。穫り入れの済んだ小豆畑にグリッドを設定し，東隅Ａ１から発掘に取り掛る。地山まで約30～40cmの茶褐色土が単一層として続いている。畑作による攪乱が多く，地山直上から石片，縄文土器細片が出土，Ａ１，Ｂ１の境から深さ30cm程のピットが発見される。しかし埋土は攪乱。

グリッド西端Ｄ10，11から柱穴状のピット，Ｄ20から炉が発見され，住居跡の存在が確認される。この層の北西隅からフラスコ状のピットが検出される。

10月18日（土）　晴

Ｃ５，６，Ｄ５，６から周囲に柱穴を持つフラスコ状ピットが発見され，完掘を目ざして作業を続行する。10時と11時の２回にわたり，近くの川添小学校４，５，６年児童約 120名職員に引率されて見学に来跡。

午後，県文化課門間光夫主任学芸主事，同中谷雅昭学芸主事来跡，調査の指導にあたる。町土木課職員遺跡周辺の地形測量を行う。


小屋
部落集会所
畑
渡辺慶治宅
畑
小屋
畑
畑
小屋
佐藤金吉宅
県道秋田雄和本荘線
18.0
17.5
17.0
小屋
畑
畑
畑
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
0
20m

挿図1　遺　跡　全　体　図

10月19日（日）　晴のち曇

C20，21，D20，21の住居跡の写真撮影と実測を行う。またC５，６のフラスコ状ピットの実測を行う。工藤町長，堀井助役，田村教育長，伊藤町文化財審議会長見学に来跡。

10月20日（月）　曇

午後一時から昨日とり残した遺構部分の実測を行う。３時過ぎから，調査の済んだグリッドの埋戻しを行ない５時調査を終了する。

② 遺構と遺物

〈遺構〉

発掘調査によって発見された遺構は，竪穴住居跡１軒，溝状遺構，１号，２号と呼ぶフラスコ状ピットである。１号フラスコ状ピットは竪穴住居跡に伴うものである。

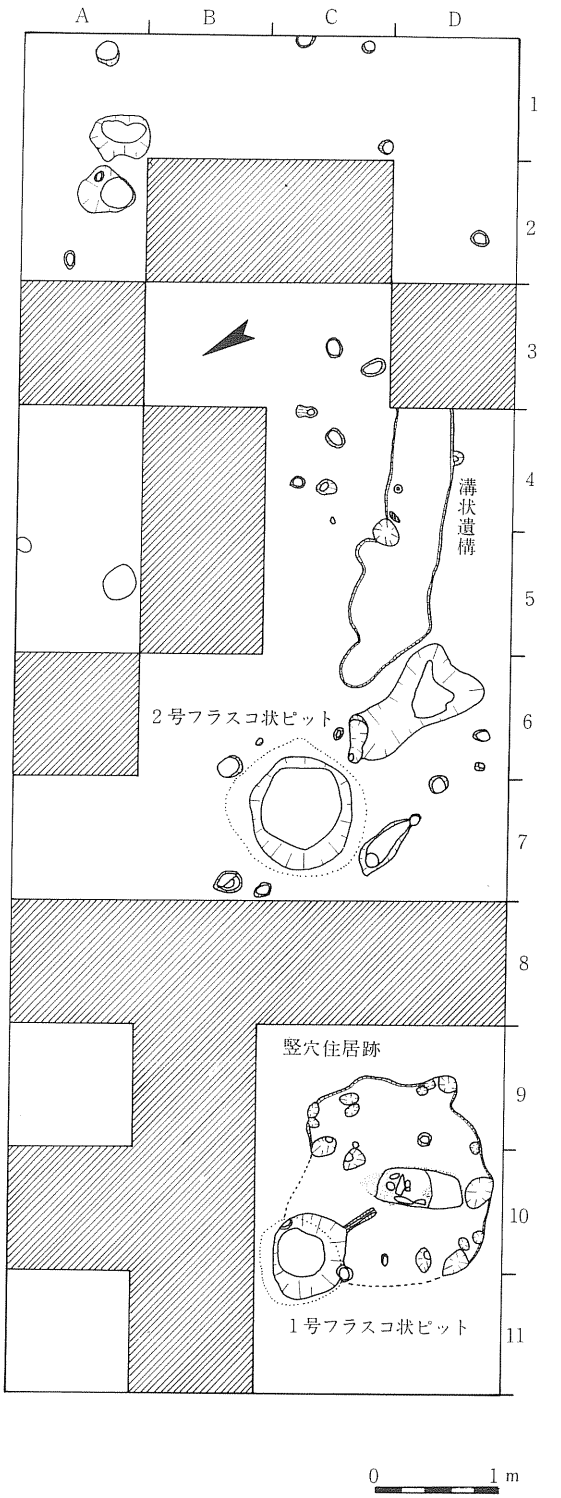
竪穴住居跡（挿図３，４　図版２）

調査区Ｃ９，10，11，Ｄ９，10，11で発見されたもので，北西の部分が畑作のために削平されていた。

長径3.70m，短径3.15mの不整円形のものと考えられ，南と東に残る壁から推察すると，地山を10cm程度掘り凹めて床としたもので，中心部より南にかけて炉が存在する。

壁はやや急に立ち上がり，床はほぼ平らで，柱穴は壁のそばや住居跡内にのみ存在する。

炉は長辺1.33m，短辺0.75mの隅丸状の長方形を呈し，住居跡の床面を15～20cm掘り込んで作っている。炉の中央には７個の礫が遺存しており，石囲であったと思われる。この礫の外側に挿図８(1)，図版７(2)の土器が埋設されていた。土器は残存部の径が15.5cmあり，縄文の施文された底部の無いものである。炉の床には，縄文の施文された土器小片が，20個ほど存在した。炉の中や周囲に



挿図２　発掘区域と遺構

ある焼土は3cm程の厚さで，赤褐色に固く焼けてしまっていた。

炉は最初長径1.33mの規模で作り使用しており，のちになって粘土質土で南側の部分を埋め0.88mに縮小している。

炉の延長線上に当たる南壁に近い所の小ピットには，頭部を炉の方に向け埋設されていた石棒があった。全長12.6cmの破損品で折損部に使用痕があり，傍に縄文の施文されたやや大きい土器片があった。

住居跡の北西部は，耕作のため壁の部分が削平されて存在しなかった。しかし，ここから1号と呼ぶフラスコ状ピットが発見された。このピットは地山を突き抜け，その下の砂利層まで掘り込んで作ってあった。挿図7(1)の土器は1号フラスコ状ピットから，(2)の土器は住居跡床面から発見された。(21)の土器は，それよりも上位の耕作土中からの出土である。

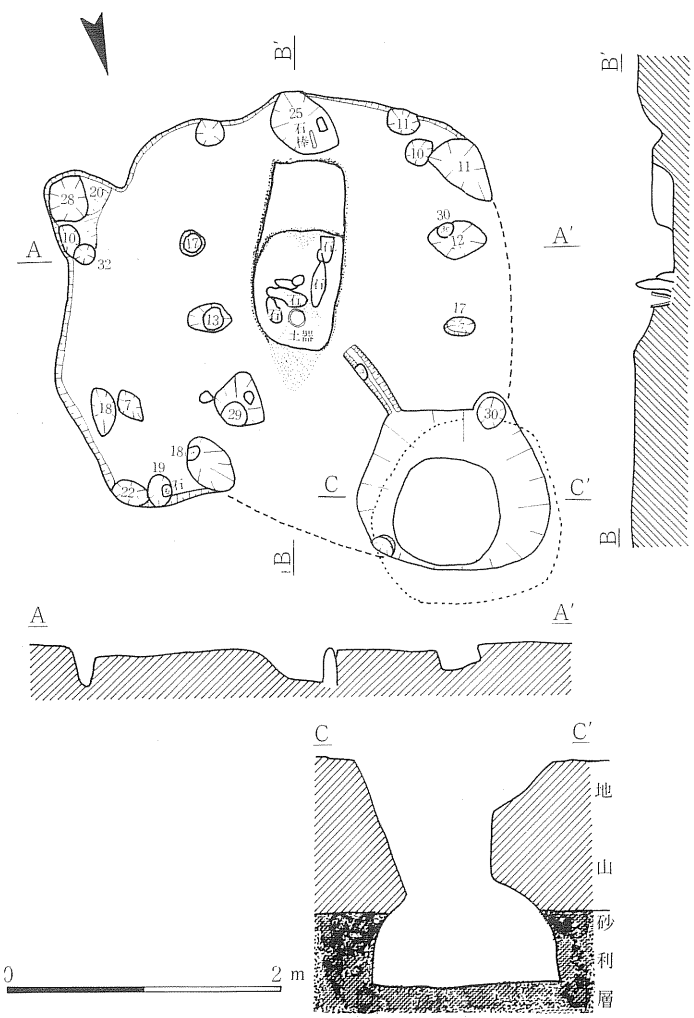
フラスコ状ピット

1号ピットは，住居跡に伴うものであり，2号ピットはB6，7，C6，7で発見され，周囲に柱穴が伴うと考えられるものである。

1号ピット（挿図3，5，図版3）

口径1.33m，底径1.48m，深さ1.68m，頸部径0.97m，頸部までの深さ1.14mを測る。

床面は，地山を掘り抜いてその下の砂利層内にあり，不整円形を成している。3種類の充填土から成り，頸部より下部に存在する暗褐色土中には，地山の崩壊土と考えられ



挿図3　住　居　跡

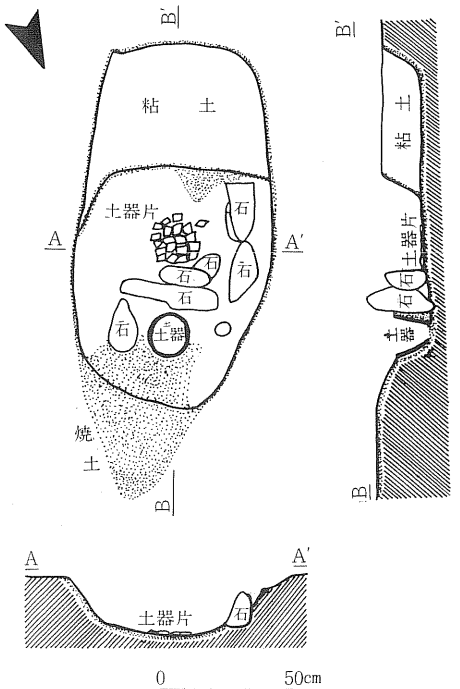
る粘土質土のブロックが数多く存在した。

出土遺物は土器のみで，それも殆んど下部の充塡土の暗褐色土からのものである。また図版３に見られる如く，住居跡の外側に当たるピットの北半分からの出土が多かった。

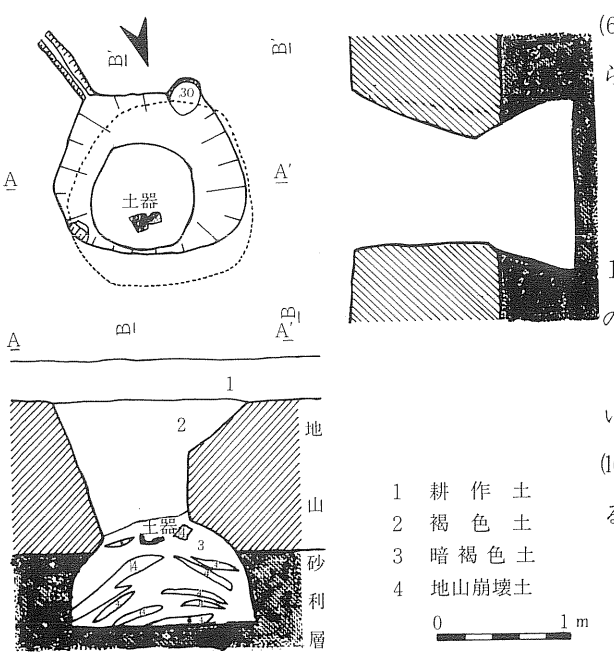
２号ピット（挿図６　図版４）

口径1.90m，底径2.26m，深さ2.04m，頸部のあまりくびれていない周囲に柱穴のあるピットである。４種類の充塡土から成り，１号と同様下部の暗褐色土には，地山と同質と考えられる粘土質土のブロックと小石が，数多く含まれていた。砂利層を掘り込んで作った床の中央部径１ｍほどの範囲に，地山と同質と考えられる粘土質土を敷いていた。またその部分には，火を使用したような痕跡はなかった。床面に近い部分の埋土は小石が多く，１号とはちがって水分の非常に多いものであった。

出土遺物は，少量の土器片のみである。挿図７(6)(30)(35)，図版５(6)，６(30)(36)の土器は，床面直上からの出土である。



挿図４　住　居　跡　炉



挿図５　１号フラスコ状ピット

溝状遺構

Ｃ４，５，６，Ｄ４，５，６で発見された幅約１ｍ，深さ0.15～0.20m，調査部分の長さ 4.2mの細長く伸びる遺構である。

耕作による攪乱土が底面まで至っている所の多い遺構で，性格は不明である。挿図７(9)(10)(11)(14)(15)(16)(17)(23)(27)(32)(33)の土器は，この遺構からの出土である。

〈遺物〉

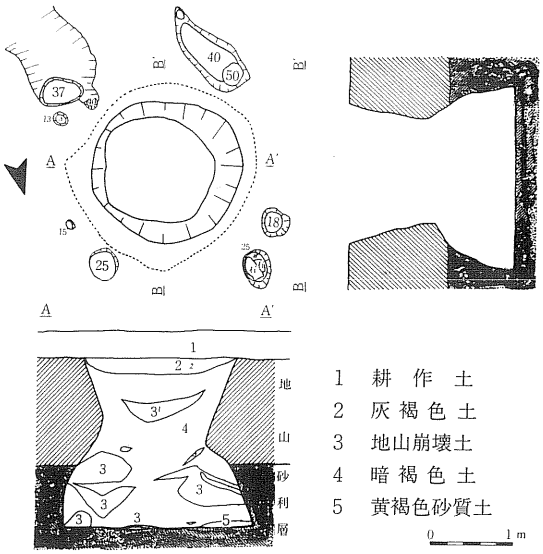
土器

発掘調査によって出土した土器は，すべて縄文

時代のもので，施文文様，器形等によって6類に分類できる。

第1類土器（挿図7(1)～(12)　図版5(1)～(12)）

磨消縄文手法の見られる土器で，胎土に雲母片を含んでいるものである。文様部を沈線で画し，その後に縄文を施文している。挿図7(4)(7)(8)は同一個体で，文様部が帯状の曲線を描いている。器壁の厚さ 0.8cmで2号フラスコ状ピットからの出土である。(6)は無文部の器壁が鰭状に盛り上っており，(30)(35)の土器片と2号フラスコ状ピット床直上で共伴していたものである。(10)(11)は同一個体で，内側の器壁が黒色土器の様に黒色を呈している。



挿図6　2号フラスコ状ピット

第2類土器（挿図7(13)(14)　図版5(13)(14)）

口縁部の小破片で，棒状工具での刺突あるいは押し付け文のある土器である。胎土に雲母片を含む。(13)の土器の刺突文は右から行っている。

第3類土器（挿図7(15)(16)(17)　図版5(15)(16)(17)）

磨消縄文手法の見られる土器であるが，沈線で画された文様帯の中に，沈線に平行に刺突文の見られる土器である。

(15)は細い爪形状の刺突文が付され，(16)(17)は竹ひごの様な細い工具で刺突施文したものである。(16)は灰白色を呈し，表面はかなり風化している。これ等の土器は，溝状遺構からの出土である。

第4類土器（挿図7(18)　図版5(18)）

赤褐色をした一小破片で，土器表面にくし目状の文様がある。本類はこれ一片のみで，1号フラスコ状ピットからの出土である。

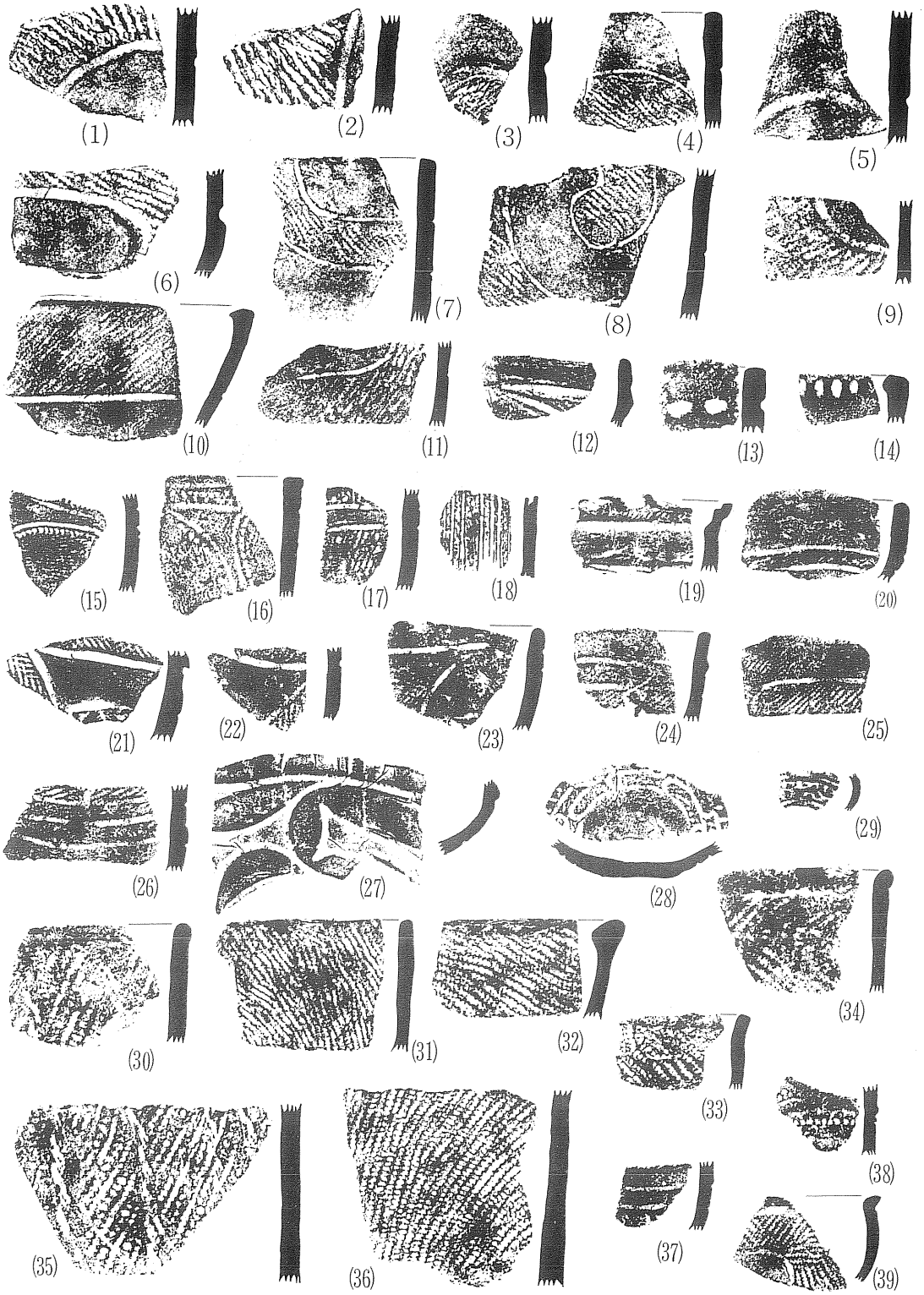
第5類土器（挿図7(19)～(28)　図版5(19)(20)，6(21)～(28)，7(1)）

磨消縄文手法で，入組文の見られるものである。縄文は第1類土器に比べ細かい。

(21)は土器片の内外面が黒褐色を呈する。(24)は縄文外側の沈線が一部で8字を成している。(27)は縄文はないが，沈線による文様構成が，(21)(22)(23)と同じもので，褐色を呈する。溝状遺構からの出土で，図版7(1)の注口土器と同一個体である。

第6類土器（挿図7(29)，図版6(29)）

A1出土のもので，この類はこれ一片のみであり，黒色を呈し，器壁は薄く，表面に羊歯状文があ


(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
(11)
(12)
(13)
(14)
(15)
(16)
(17)
(18)
(19)
(20)
(21)
(22)
(23)
(24)
(25)
(26)
(27)
(28)
(29)
(30)
(31)
(32)
(33)
(34)
(35)
(36)
(37)
(38)
(39)

挿図7　土　器　拓　影

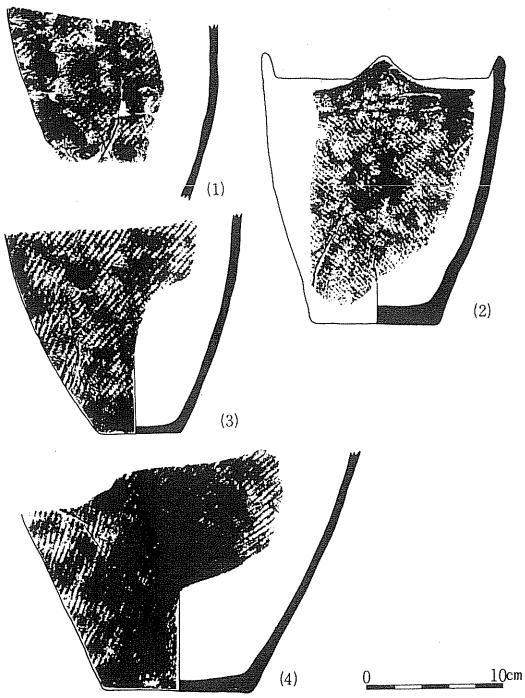
る。

第7類土器（挿図7(30)～(36)，8(1)～(4)　図版6(30)～(36)，7(2)～(5)）

縄文のみ施文された土器である。挿図7(30)と(35)は同一個体であり，挿図7(6)と共に2号フラスコ状ピット床面直上からの出土である。(36)は竪穴住居跡の石棒と共伴のものであり，挿図8(1)は竪穴住居跡の炉に埋設されていたものである。破損品で，残存部の径は16cm，器壁の厚さは 0.6cmと薄い。

挿図8(3)(4)(5)は1号フラスコ状ピットからの出土である。

(3)は破損品で，推定口径18cm，底径 9.1cm，器高20cm，器壁は 0.7cmある。口縁は4つの頂部を持つ波状をなす様である。頸部に浅い沈線，そしてそれ以下に縄文の施文されているものである。(4)は上部から見ると，楕円形に器のゆがんでいるものである。(3)(4)(5)は胎土，焼成ともに類似したもので，茶褐色を呈している。いずれも，1号フラスコ状ピットの床面より，60cmほど上位の所から出土したものである。



挿図8　土　器　拓　影

表採土器（挿図7(37)(38)(39)　図版6(37)(38)(39)）

A1，2，3，B1，2，3からの採集品である。(37)(39)は第5類に，(38)は第3類に入る。

石器，石製品

磨製石斧，凹石，石棒，鳥を思わせる石製品がある。

磨製石斧（挿図9(1)，図版7(6)）

C1から出土した現存長 4.2cmの粗粒玄武岩か凝灰岩質のもので，破損品である。

凹石（挿図9(4)　図版7(7)）

C4から出土の石英斑岩の礫で作られている。すり石としても使用されたと見えて，全面つるつるしている。特に側面と下面が著しい。

石棒（挿図9(3)，図版7(9)）

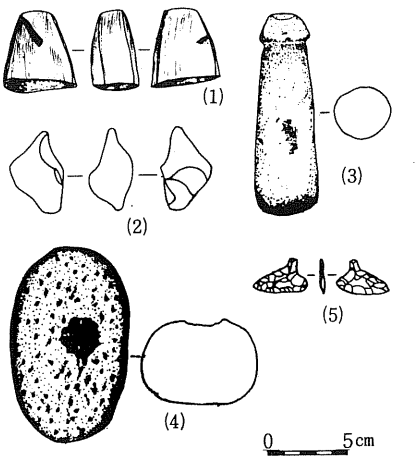
現存長12.6cm，最大径 3.9cmの石棒の頭部に近い部分の折損品で，石質は石英安山岩である。折損部分に使用痕があり，頂部に深さ 0.3cmの凹のあるものである。竪穴住居跡からの出土である。

石製品

凝灰質砂岩のもので，各面ともすられている。長さ 4.2cm あり，鳥を思わせるものである。

表採品・石匙

硅質岩の横型の小さいものである。



挿図９　石器・石製品

③　ま　と　め

鹿野戸遺跡から出土した第１類 ～ 第３類土器は，縄文中期末のものと考えられ，その編年的位置は大木10式期のものと思われる。第５類の土器は縄文後期のものと考えられ，第６類は縄文晩期大洞ＢＣのものである。第４類ははっきりしないが，第１～３類に近い時期のものと見たい。第７類挿図７(30)(34)(35)(36)，８(1)(2)(3)(4)の土器は，第１，２類の土器と竪穴住居跡や，２号フラスコ状ピットで共伴関係にあるため，大木10式期のものと思われる。

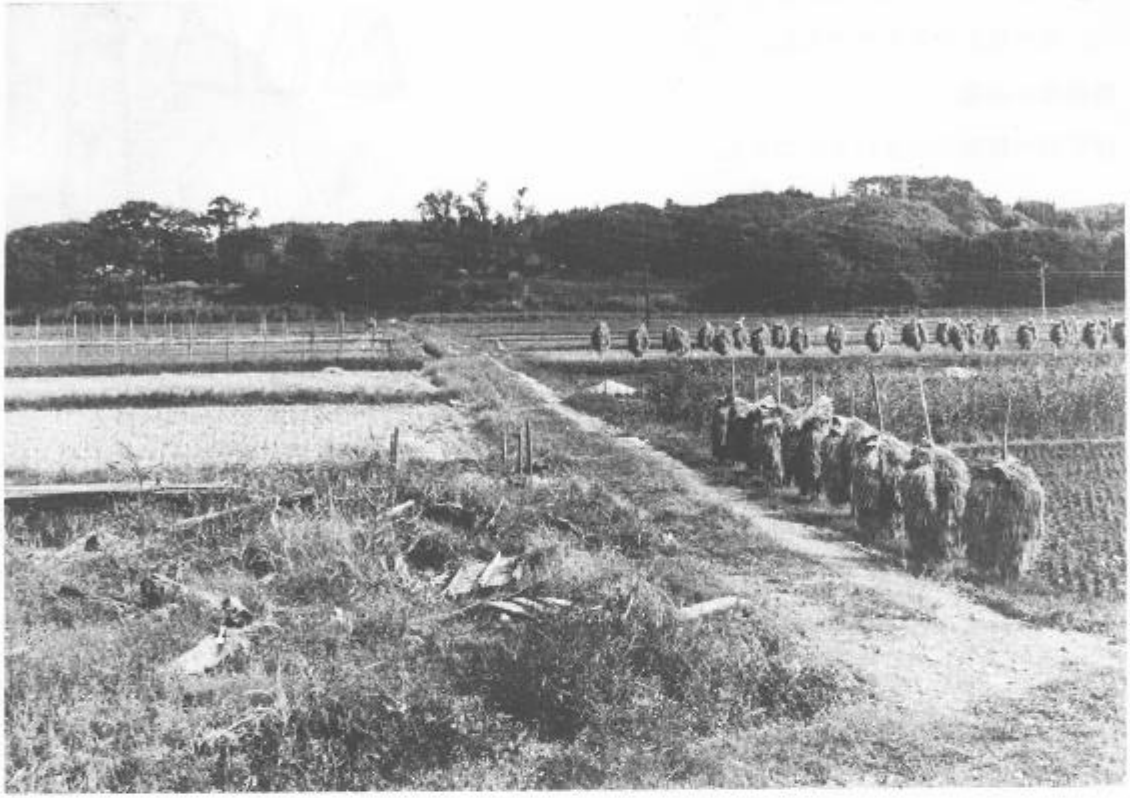
すなわち，発見された竪穴住居跡，２号フラスコ状ピットは縄文中期末，溝状遺構は縄文中期末～後期の時期が考えられる。

さて，平面プランが不整円形で，小型の竪穴住居跡は，協和町米ケ森遺跡や，秋田市坂ノ上遺跡の住居跡に類似点を持つものである。また，秋田市下堤遺跡のように住居跡内にフラスコ状ピットを有すこと，八竜町萱刈沢貝塚ＦＰ６のように単独で周囲に柱穴を持つフラスコ状ピットの発見は，縄文中期末の住居のあり方と，フラスコ状ピットの持つ性格を考える上で大切な資料といえる。

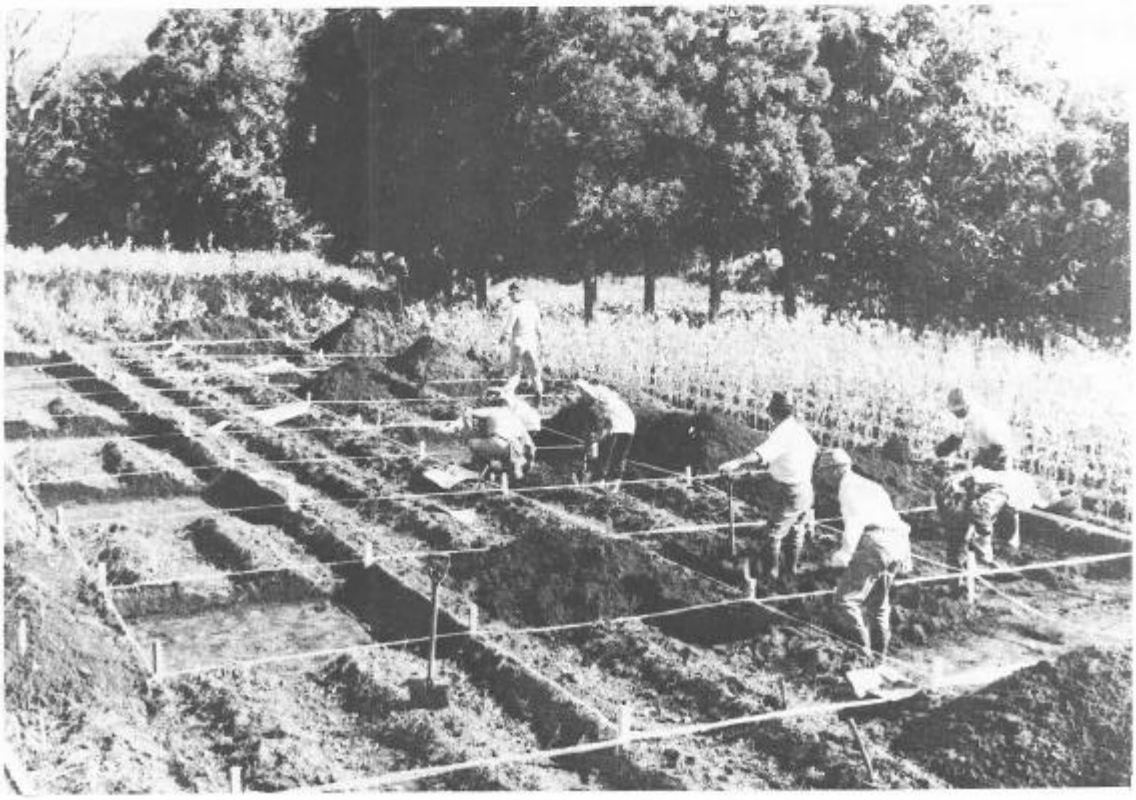
参　考　文　献

- 協和町教育委員会「米ケ森遺跡発掘調査報告書」昭和46年
- 十和田町教育委員会「黒森山麓縄文期竪穴群」昭和49年
- 富樫泰時「秋田市柳沢遺跡発見の住居跡」月刊考古学ジャーナル　No.99
- 八竜町教育委員会　第２次概報「萱刈沢貝塚」昭和48年　第3・4次概報「萱刈沢貝塚」昭和49年
- 秋田市教育委員会「概報第４次下堤遺跡」昭和47年
- 秋田市教育委員会，秋田考古学協会「小阿地地区遺跡分布調査概報，坂ノ上遺跡」昭和50年
- 青森県平賀町教育委員会「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」昭和49年
- 青森県教育委員会「むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報」昭和49年
- 宮城県南方町「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」昭和50年
- 草間俊一「日本原始時代の生活についての一考察―フラスコ状竪穴に関して―」岩手地方史の研究　昭和44年
- その他

図版1

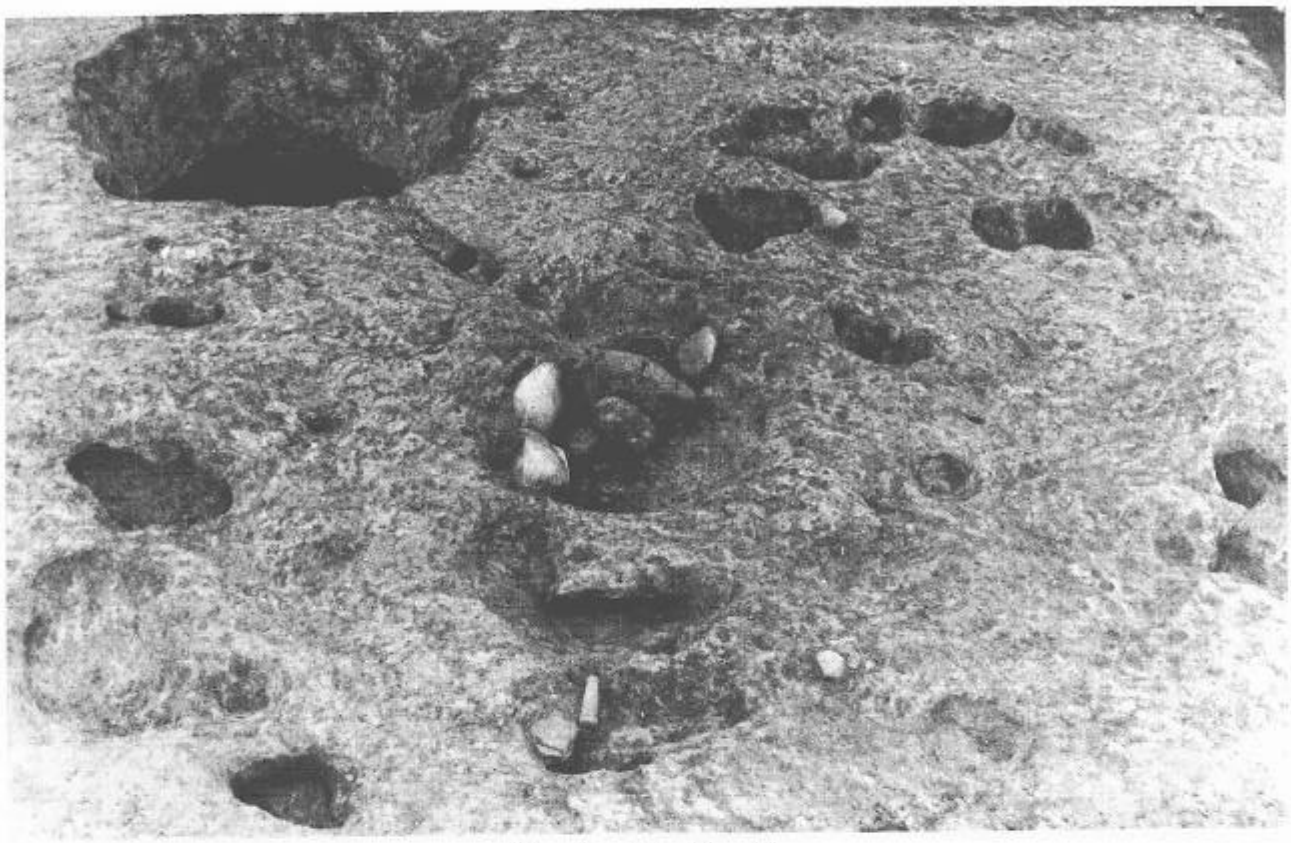


遺　跡　遠　景



発掘調査のようす

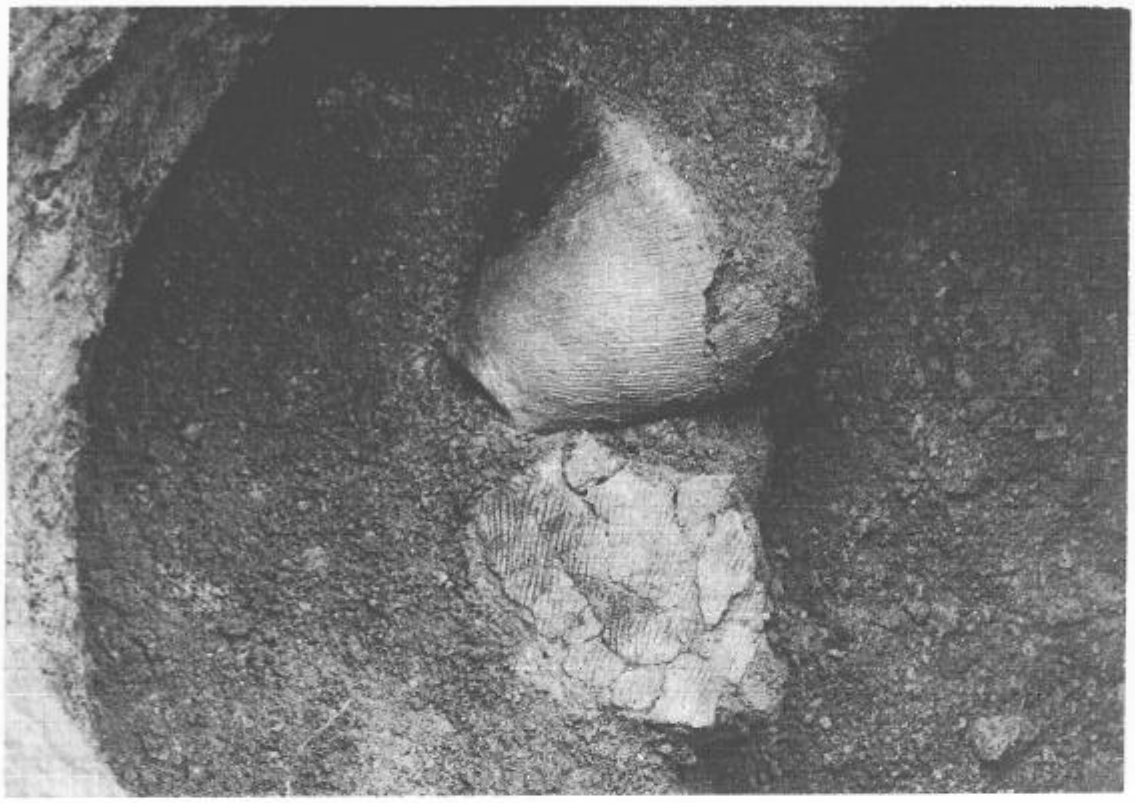
図版 2



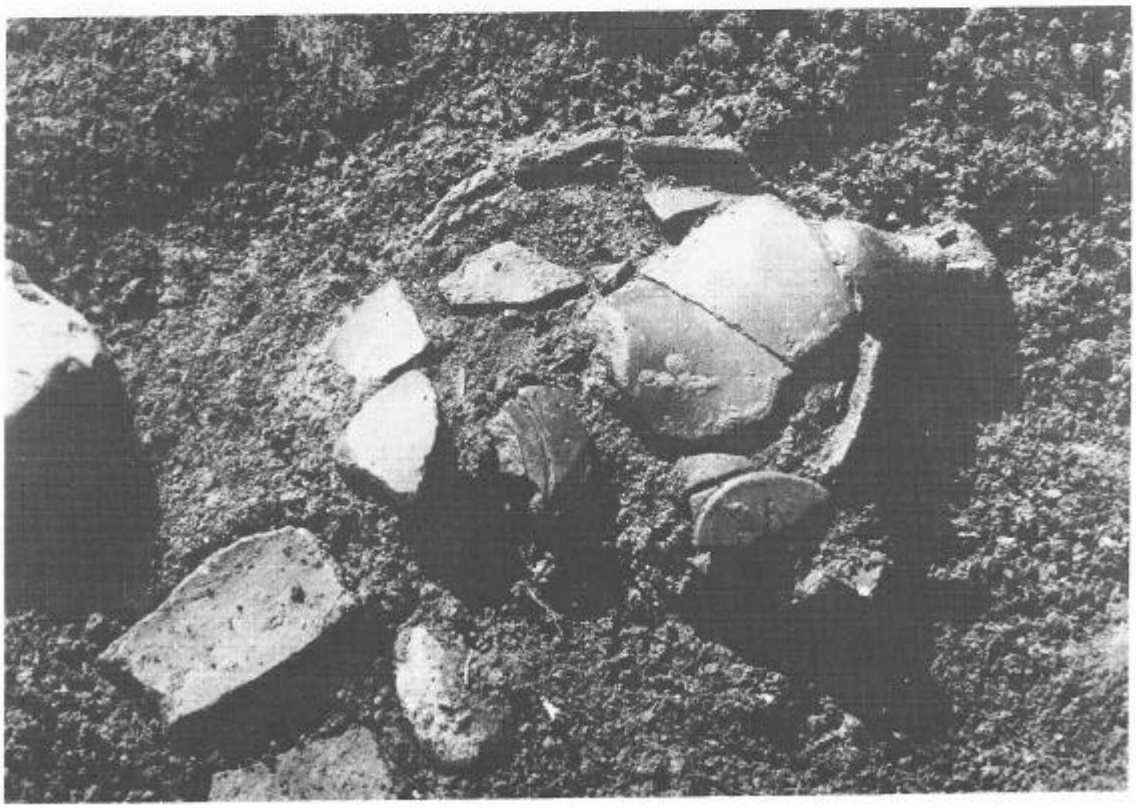
竪 穴 住 居 跡

石 棒 の 出 土 状 態

図版 3

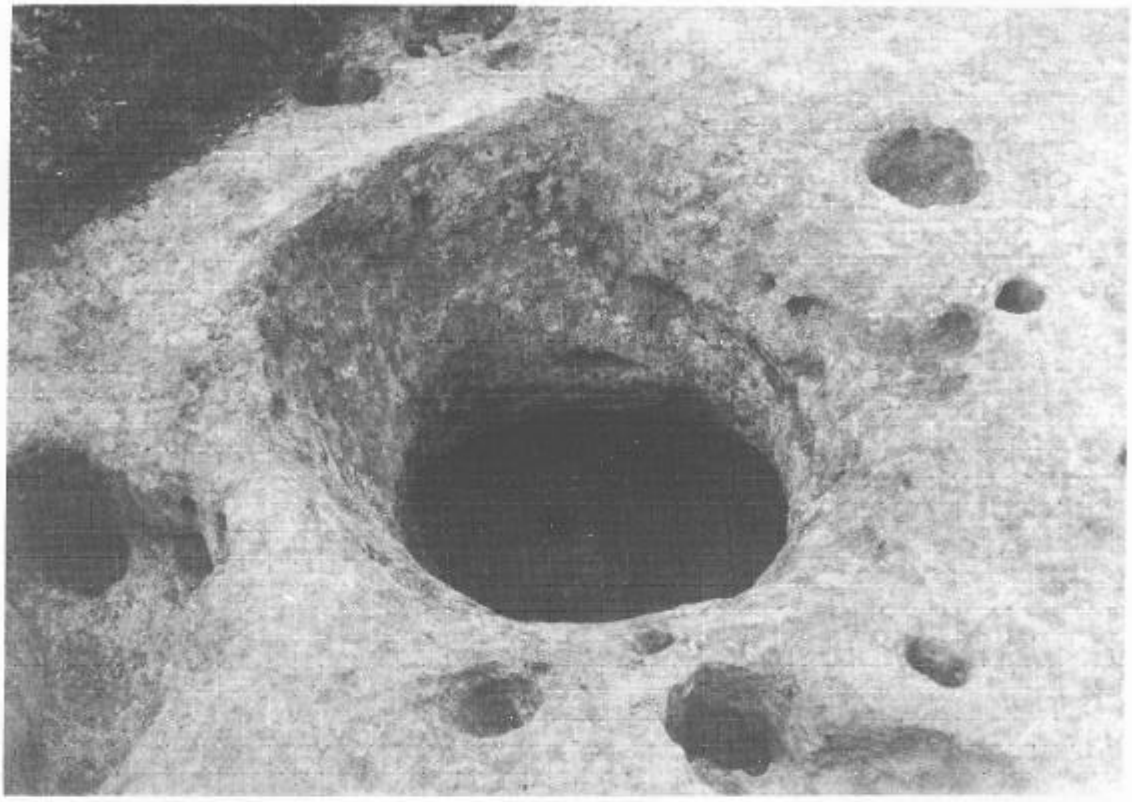


1号フラスコ状ピット土器出土状態

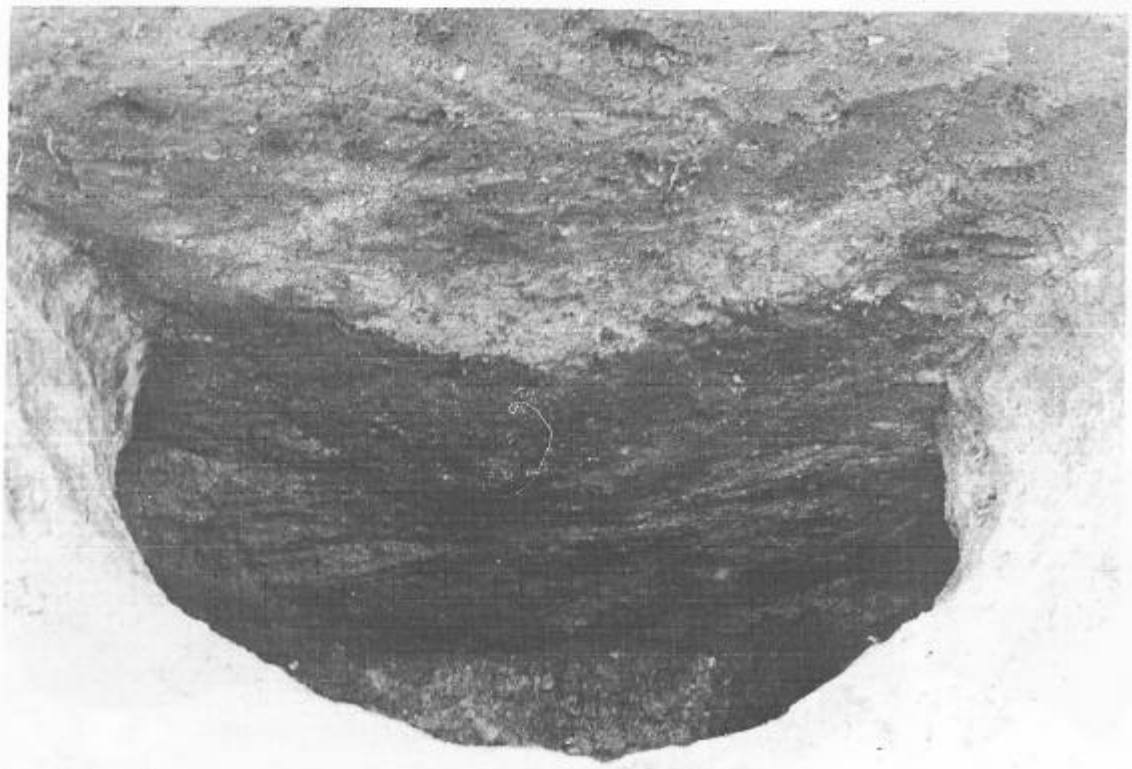


溝状遺構における土器出土状態

図版 4

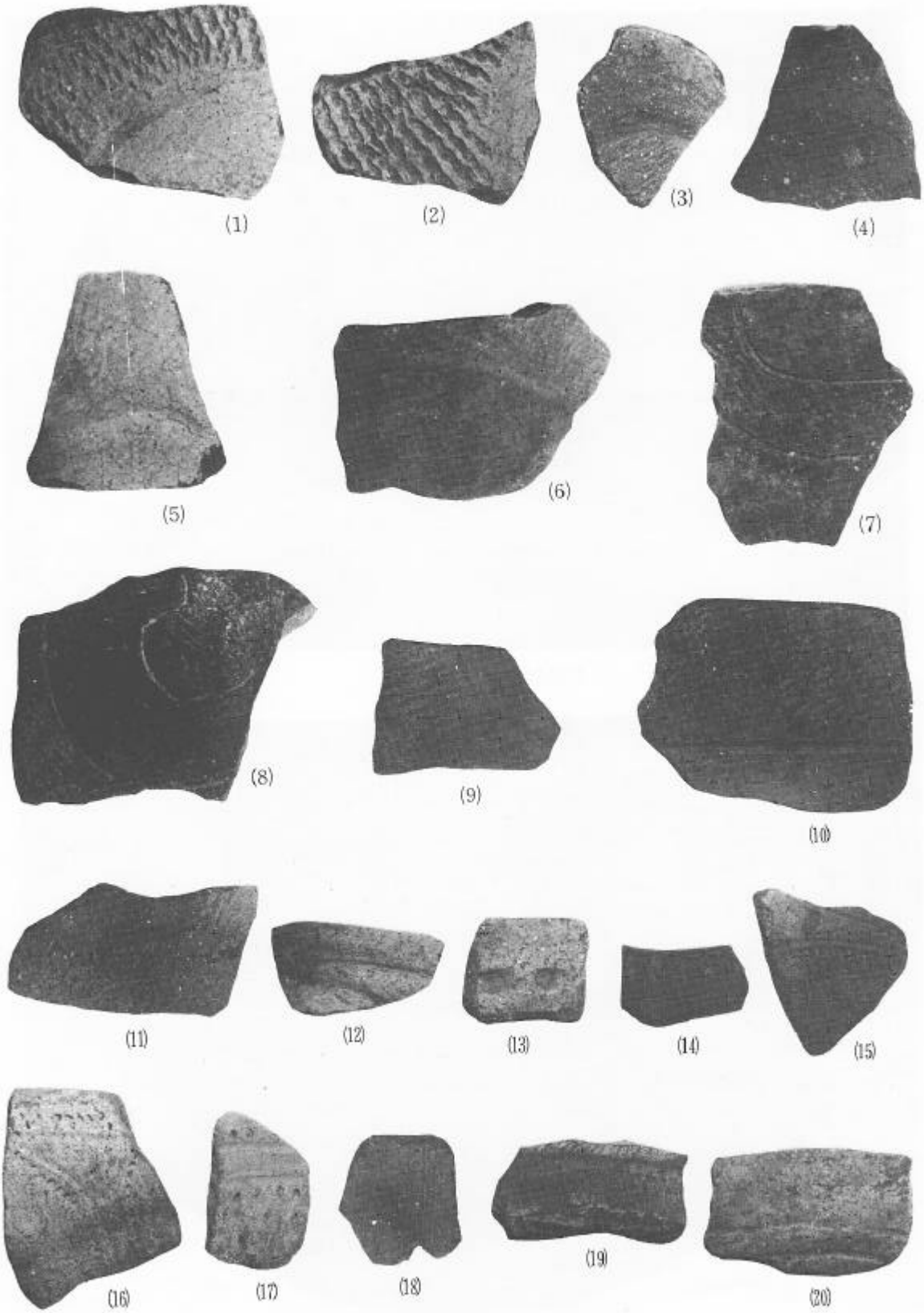


2 号フラスコ状ピット

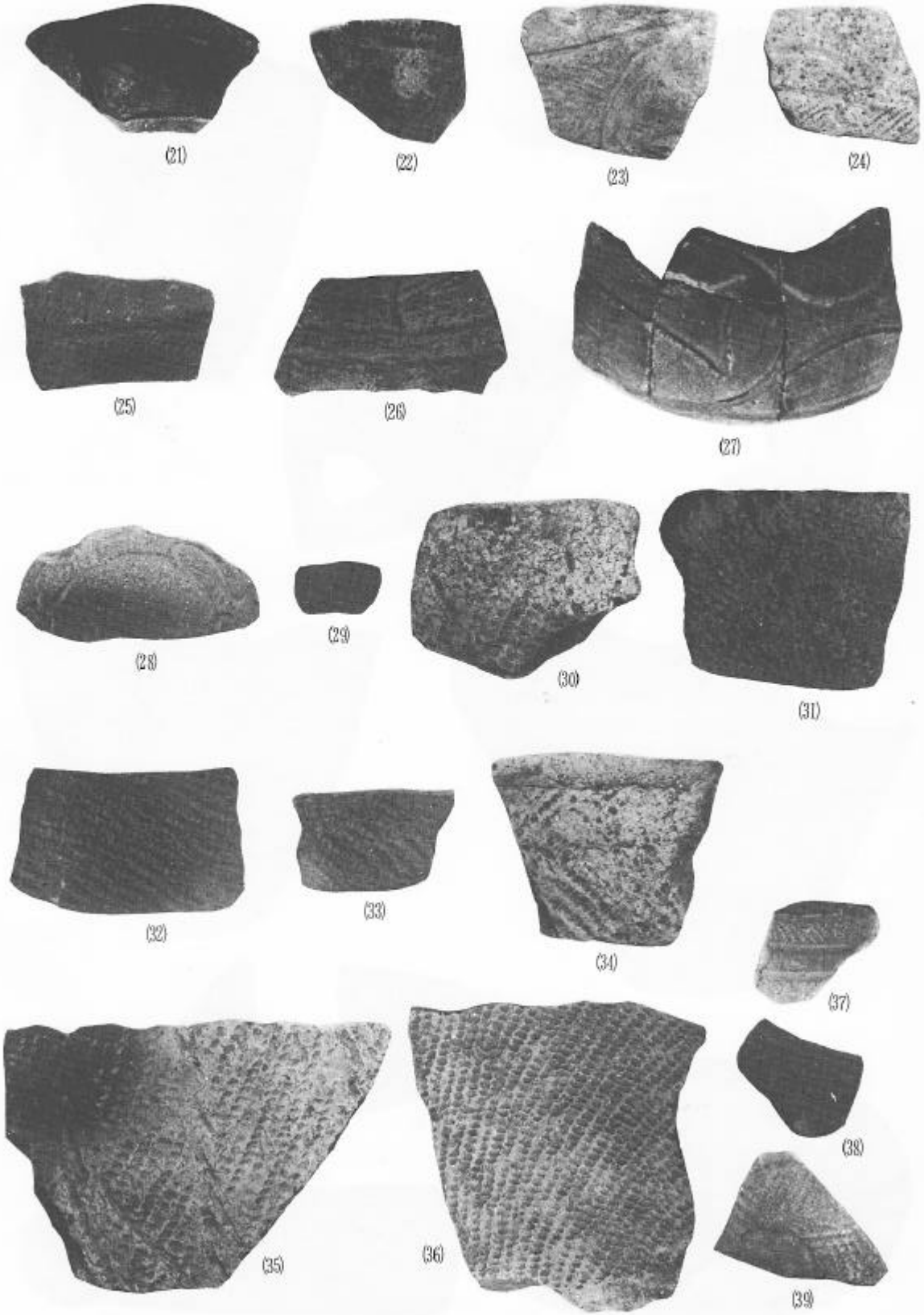


フラスコ状ピットの断面

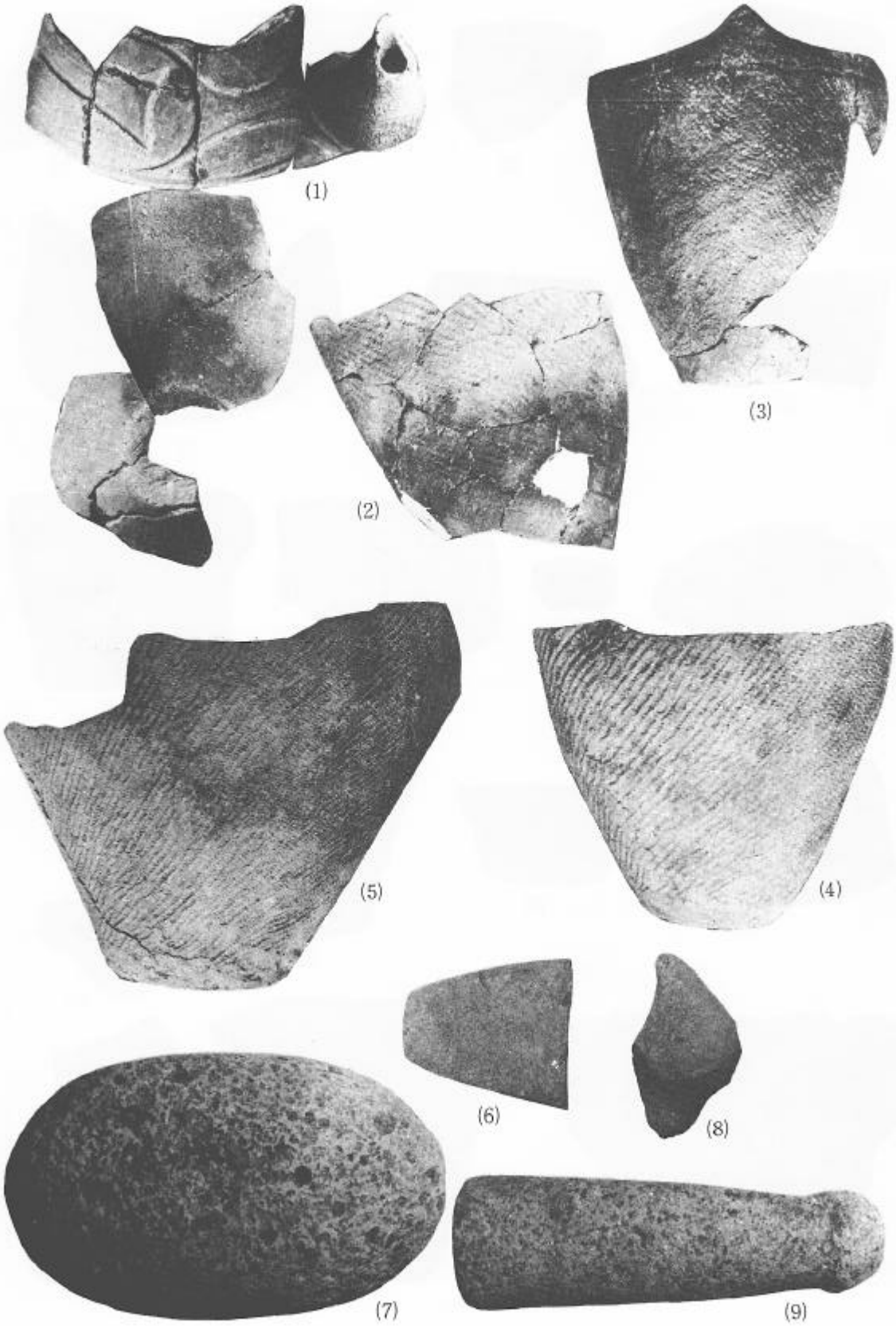
図版5



図版 6



図版 7



II 石 坂 上 遺 跡

① 調査方法と過程

台地縁の崖面に認められる，遺構の上部斜面に調査地点を定めた。調査はグリッド方式によった。

調査日誌

10月25日（土）　晴

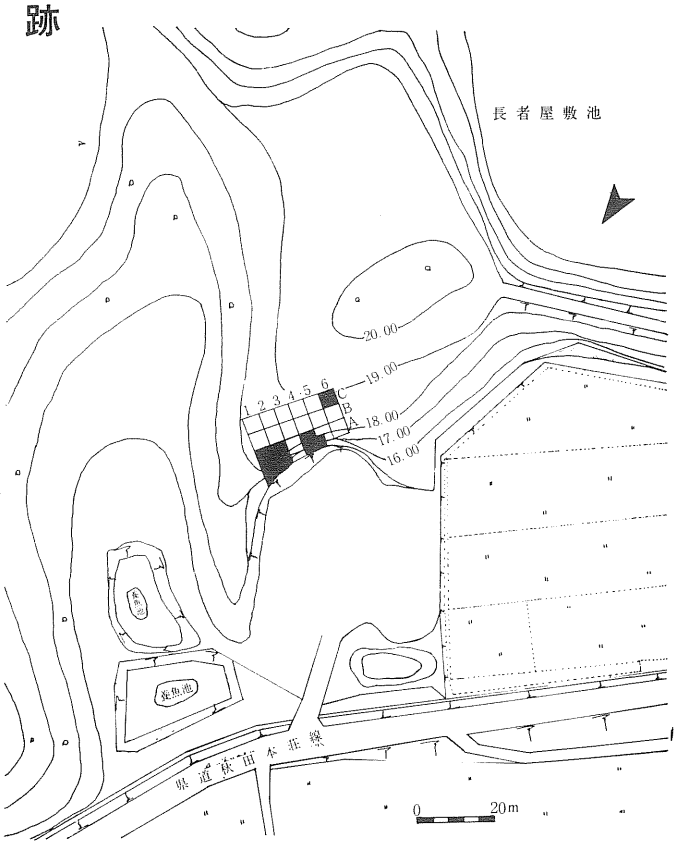
Ｃ６から方形の小ピット２個を検出。Ａ４にも同形のやや大きなピットが発見される。

10月26日（日）　晴

Ａ４のピットの調査とＡ１・２にわたるピットを調査。午後地形の測量をする。出土遺物は，縄文土器片４点のみ。

10月27日（月）　晴

検出されたピットの実測を行い，午後３時発掘調査を終了す。



挿図１　遺 跡 地 形 図

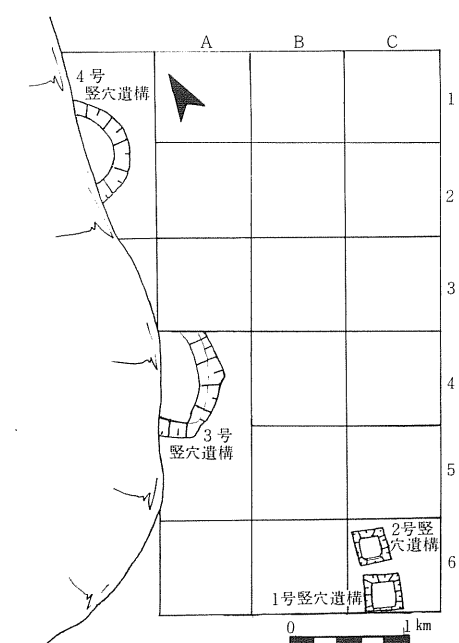
② 遺 構 と 遺 物

遺構（挿図３～６，図版１～２）

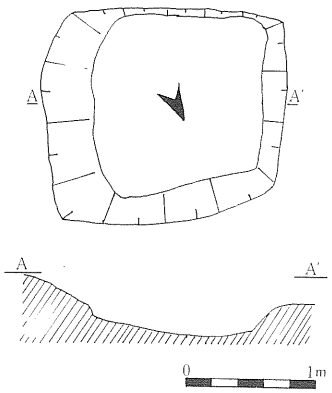
１号竪穴遺構は，南北1.62m，東西1.86m，深さ0.35mあり，床面まで黒褐色土が続き，土器片や柱穴は認められず，床面までの落ちこみはゆるやかである。

２号竪穴遺構は，南北1.62m，東西1.60m，深さ0.34mあり，１号と同様の埋土で，土器片や柱穴は認められない。

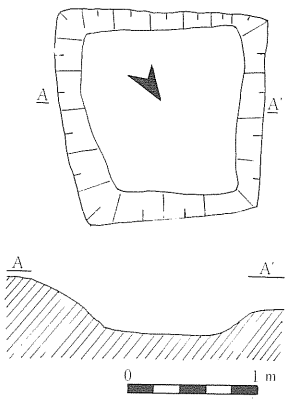
３号竪穴遺構は，現存部南北５m，東西 3.5m，深さ0.67mで西側は土砂採取によって削りとられており，その全形は不明である。埋土は，粘土ブロック混入茶



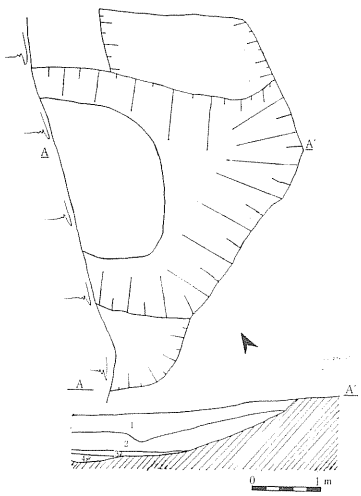
挿図２　遺 構 配 置 図



挿図３　１号竪穴遺構

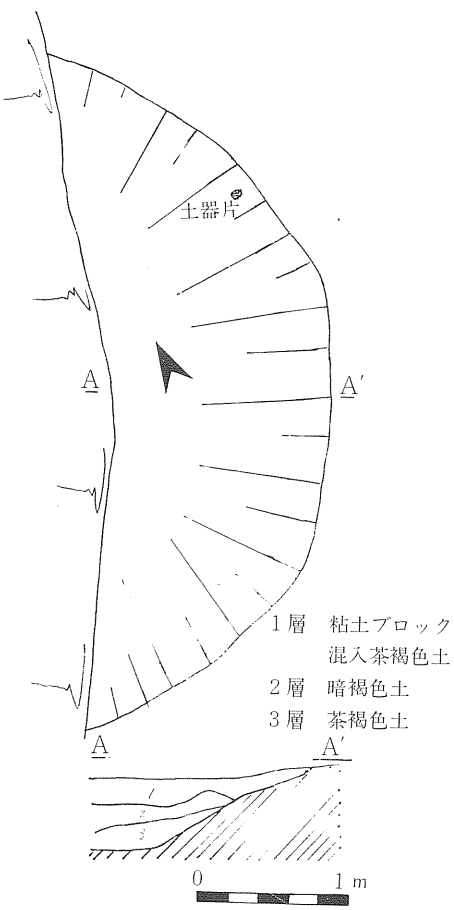


挿図４　２号竪穴遺構



挿図５　３号竪穴遺構

１層　粘土ブロック混入茶褐色土
２層　暗褐色土
３層　灰色粘土
４層　黄褐色土



挿図６　４号竪穴遺構

褐色土，暗褐色土，灰色粘土，黄褐色土の４層からなる。

４号竪穴遺構は，現存部南北4.40m，東西1.45m，深さ0.50mで，埋土は，粘土ブロック混入茶褐色土，暗褐色土，茶褐色土の４層で，西側は３号と同様削りとられており，その状態は不明である。

遺物（挿図７　図版２）

土器

本遺跡からの出土遺物は，縄文土器片４点のみで，全て４号竪穴遺構の埋土からである。

挿図７の１は，口縁部無文で胴部にＲＬの縄文があり，表面に黒色の炭化物が付着している。器壁の厚さ 0.6cm，胎土に雲母片を含み，口縁部がくの字に外反する壺の破片で灰褐色を呈する。２～４は，ＲＬの縄文が見られ，器壁の厚さは 0.7cmあり，胎土に雲母片を含むものである。

③ ま　と　め

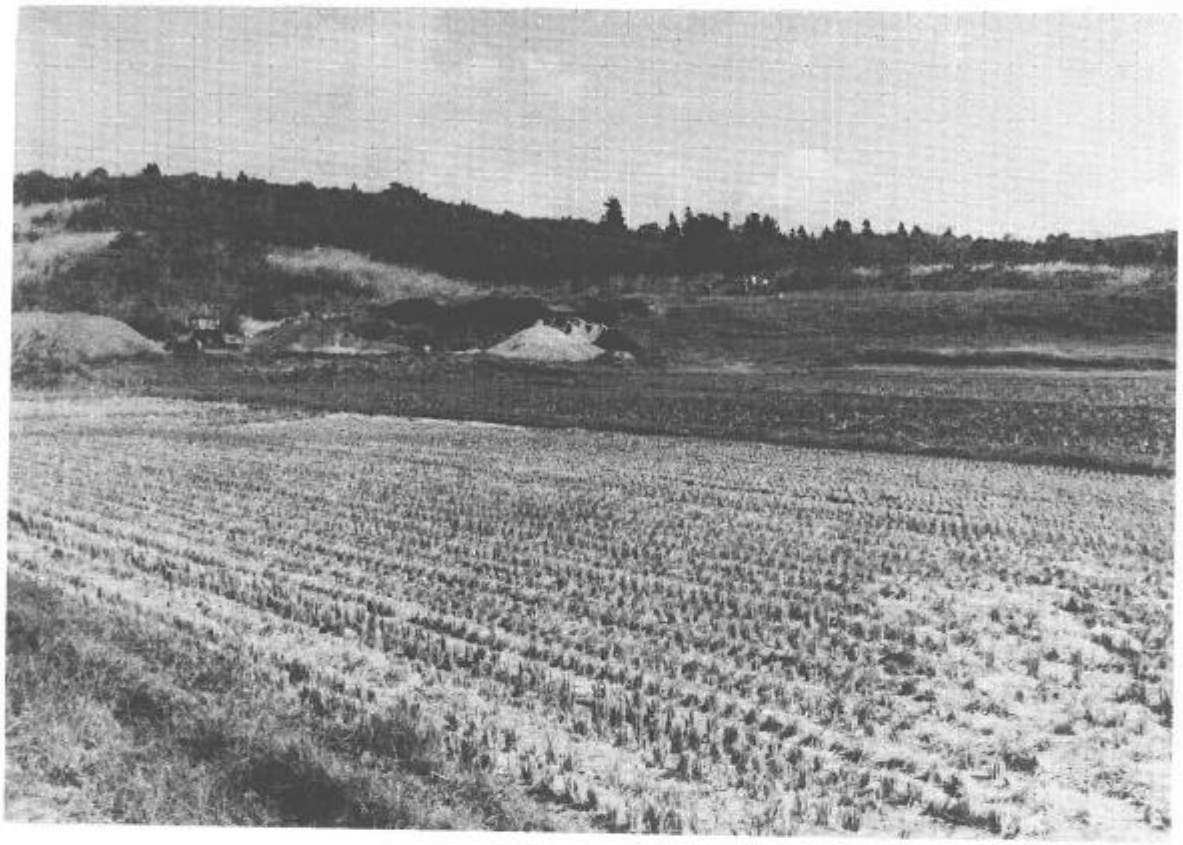
すでに述べたように，調査によって発見された小型の１号，２号竪穴遺構は，ほぼ方形を呈するものである。しかし，これより大きい３号，４号竪穴遺構は，過半が削り取られてその全形はつかめていない。

出土遺物は，４号竪穴遺構から出土した土器片だけである。外反する口縁部を持ち，縄文の施文された薄手，焼成良好なもので，縄文後期と思われるものである。床面からはなれた位置で発見されており，遺構は土器片とそうはなれた時期ではないと思われるが，性格などは不明である。

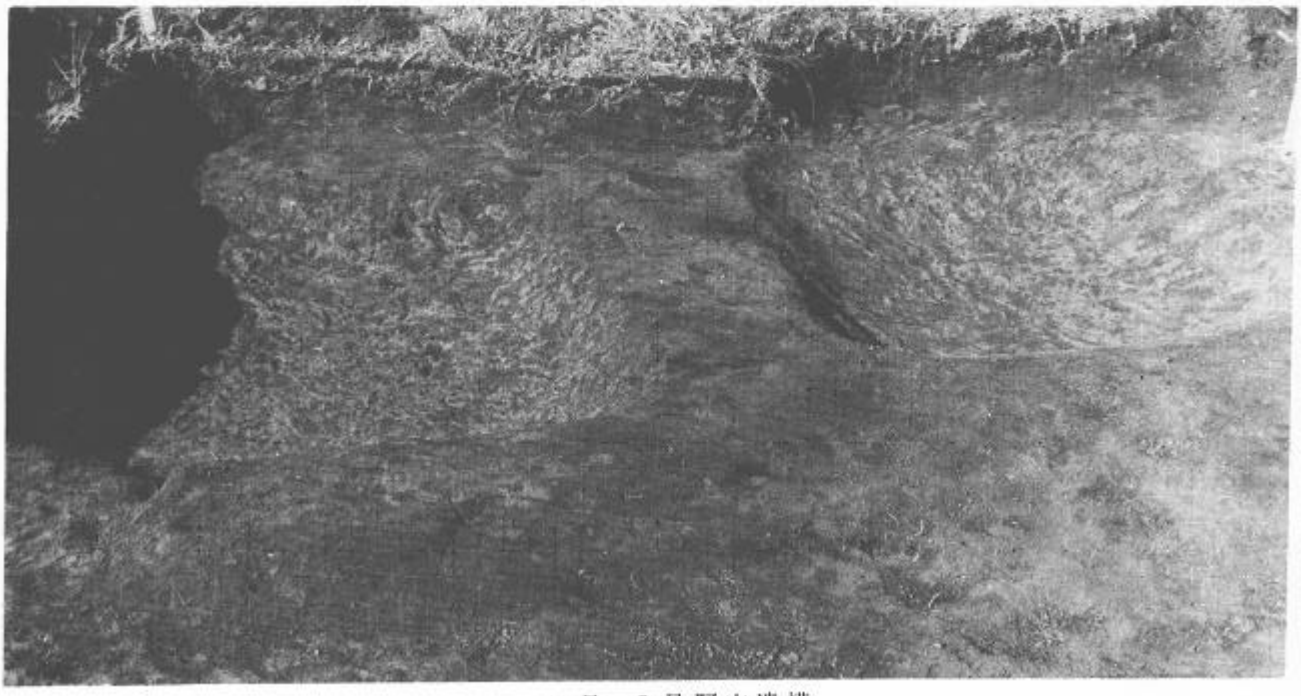
挿図７　土　器　拓　影

最後になりましたが，縄文中期末の住居跡と土器の編年について，県立博物館富樫泰時氏，秋田市教育委員会菅原俊行氏に色々ご指導をいただきました。石器の石質については，県立博物館加藤万太郎氏にご教示をいただきました。記して厚く御礼を申しあげます。

図版1

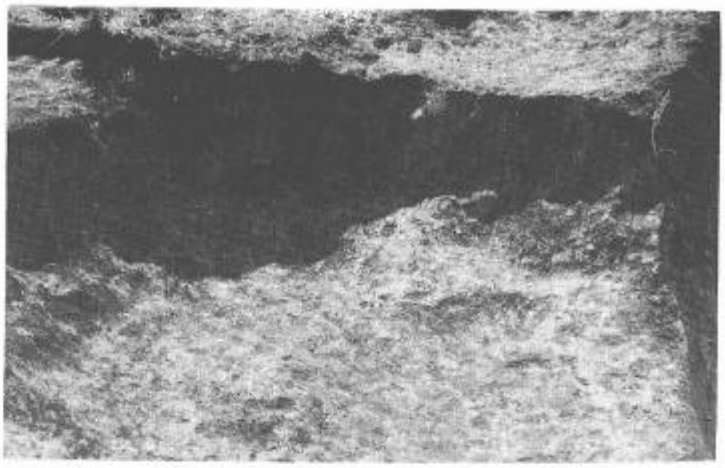


遺　跡　遠　景

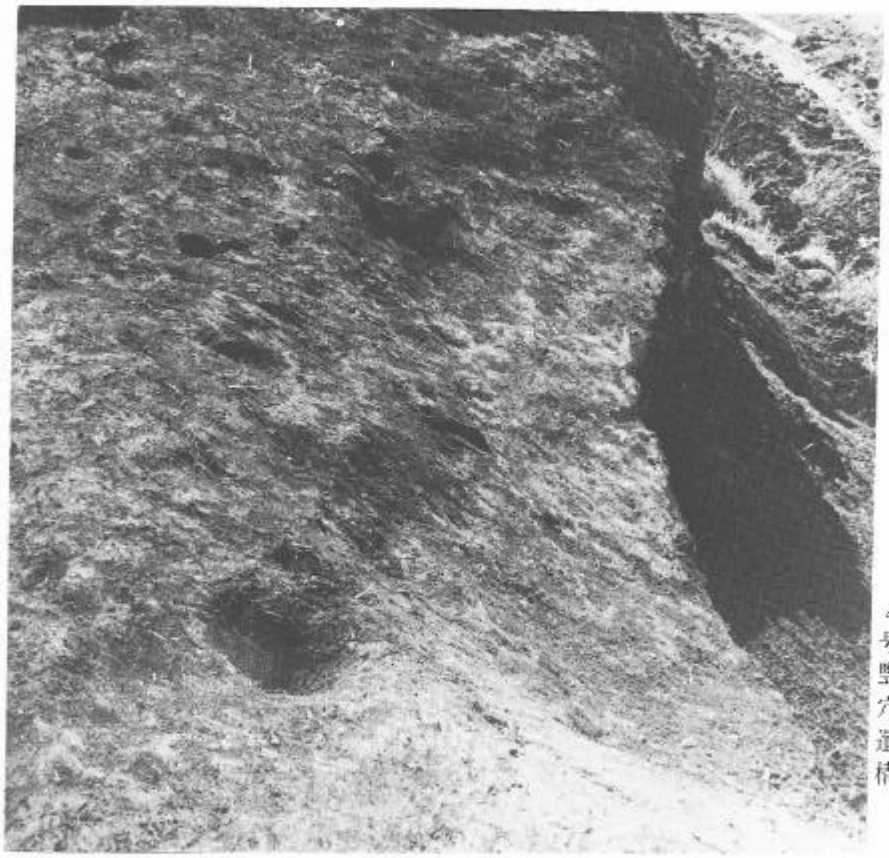


1号，2号竪穴遺構

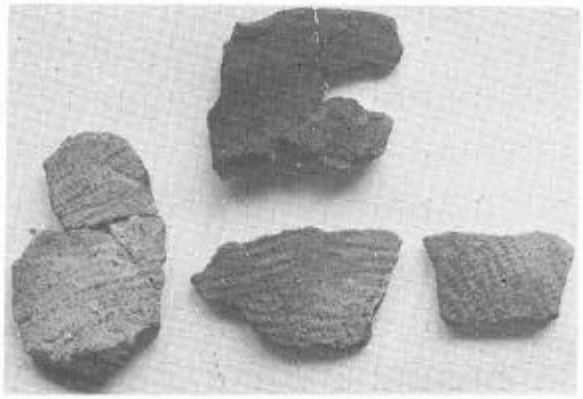
図版 2



3号竪穴遺構



4号竪穴遺構



4号竪穴遺構出土土器